

日本文化とヨーロッパ文化における 樹木崇拝の比較について

クリスティナ・カミンスカ*

はじめに

ポーランドの民俗研究において、その研究範囲が多岐にわたるという状況の中で、昔から取り上げられていたテーマの一つに、木の崇拝の問題がある。最も古くからの資料は、まず民間に行われる木（その枝葉）と魔法技術、あるいは民間治療との関係を調べたものが主である。早くから樹木とデモン（吸血鬼のような荒ぶる霊）との関わりが考えられていたことが、その研究における一つの傾向である。同時にみられるもう一つの傾向は、ポーランド農民の一年サイクルにおける農作に伴う儀礼や行事に使われる、緑木を調べた結果、樹霊を地母神の具現と説明することである。そこからポーランドの民間に伝わっている神話・伝説を分類し、ギリシヤ神話に出るモチーフと合わせて比較してみる。結局、樹木信仰・樹木崇拝は、東スラブ人としてのポーランド人の起源を探るきっかけ、または手掛かりともいえるものとみられた。

同様の志向をもって、最近ではクリスマス・ツリーの原型探り、その利用など、世俗化されてくる社会との関わりの上で、広く論じられている。原始宗教における樹木崇拝からカトリック文化における十字架・路傍のキリストなどの小祠までの展開が、教会側から評判を受けながらも、展開されている。

ここで以下は、ポーランド文化にみられる樹木信仰の要素を紹介し、また日本文化における同様の民俗現象との比較によって、その視点の相違を明らかにしたい。

1. 事例

筆者がヨーロッパ文化における樹木崇拝の要素を日本の現象と比較する際、ヨーロッパ文化の全ての民族をみるのではなく、自文化であるスラブ民俗文化をまず限定的に扱う（註1）。また、スラブ人の中でも、それぞれの種族毎に樹木崇拝を説明するのではなく、ヨーロッパ文化を背景にしたポーランドの民間信仰にみられる「木」の問題を紹介する（註2）。そのあと若干ながら、日本人が持つ木の信仰と比較してみる。

最初にポーランドの民間伝承にあらわれる樹木の機能を紹介する。まず、現在行われる祭り、行事の中でどういうふうに関わりが位置付けられているか見てみる。

ポーランドの行事は太陽暦による季節の移り変わりの節目によって行われる。これは、この地にキリスト教が入った後、教会祭祀と結ばれるようになった（表1）。異教徒の呼称（＝「村の」「田舎の」「村人」を意味する PAGANUS、ポーランド語の POGANIN）は、村は異教の隠れ場所であったことを示している。このキリスト教の行事の背景には、古代信仰の名残が昔のまま潜んでいる。

緑の木を用いるのは、祭りのときである。祭りの時間は、神話時代への逆戻りを意味し、このときに限ってあの世との交流が有り得るとされている。精霊と悪霊は地に戻り見えないながらも、人間の側に存在し、また害悪をもたらすという。樹木は、まず悪除けの役目を果たすとされる。そしてまた、死に勝利して生＝豊饒をもたらすという。

*筑波大学大学院歴史・人類学研究科

樹木は、この考え方によって、最近に至るまで、自然の移り変わりに関わる農耕儀礼から人生儀礼まで広く使用されてきた。

ここで、3月21日から6月23日までの間に行われる行事をみて、木の役割を考えてみよう。

最初に春祭りとして復活祭について述べる。復活祭、つまり自然の冬＝死から再生することを意味するものである。まず、一週間前から物忌みが始まる。大月曜日から復活祭があたる大日曜日の前夜までである。大日曜日がくると、生命の象徴とされる卵を家の庭に隠したり、刺のある植物の枝を牛小屋や家の入口などに挿したりする。そして一晩中じっと家の中に籠る。それはこの夜、悪霊がくるとされ、それらに会うとあの世に連れて行かれると信じるからである（註3）。

日本では同じように折り目＝節句という時期がくると、家の周辺に厄除けの枝を挿す風習がある。節分のとき鬼がくるといい、屋敷の建物に柵の枝を挿す。佐々木勝が指摘するように、季節の移り変わりは厄神が人間の世界に入ろうとするので、木の枝でこれを防ぐのである。

「当然 負の作用をする神霊、すなわち厄神に対しては、生活空間への侵入を拒むことに力点が置かれる。季節や年の変わり目は、ことにそうした厄神が頻繁に訪れるとされてきた。」（註4）と述べられており、両文化における魔除けとしての木の観念の類似がみられることがわかる。

次に、大金曜日の時「神の傷」という儀式が行われる。朝起きて親は白樺・ねず・すぐり・はしほみなどで作った棒をとって子供を叩く。子供が丈夫に育つことを願ってやるらしい。逆に子供は親を叩いては行けない禁忌がある。伝説によると、親を打った子供は死んで、親を叩いた手が枯れて柳の木に成長したという（註5）。

この反キリスト教的な習慣には、「魔法杖」がもたらす生命の観念が潜んでいる。これを持って、同じ日にキリスト教会でミサを行い、信者は刺のある植物をとってキリストのせっかんを再現するように自分を軽く打つ。

翌日また教会へ行って、とげあるいはさしざし



写真1 Palma

の輪と聖水を持ってくる。水を家の周りや畑に注ぎ、輪をお守りとして部屋の中で飾る。そしてSWIECONKA（シヴィエンツオンカ）という網籠の中に卵・パン・塩・肉を入れて神父にお祓いをしてもらう。それぞれの食べ物に緑の枝葉を挿す。これは植物神として作物を守護する木であり、この春から一年中、食料があるようにという意味である。

復活祭の本番は、大日曜日である。みんなはPALMA（バルマ）という棒をもって教会へ行くので、この日をバルマの日曜日ともいう（写真1）。最古のPALMAは柳の枝で作ったので、柳の日曜日ともいう地方もある。

PALMAには、必ずつぼみがついている枝を選ぶ。春に開くつぼみは、再生する自然を象徴する。PALMAを「生命の棒」といい、昔は、つぼみを食べたようである。そうすると、一年中病気をしないで幸福で過ごせるといわれている。

教会へ行き、神父にはらってもらってからPALMAを家の外と内に飾っておく。大抵、これに使う枝の数は、飾る場所の数と一致する。そして置く場所によって、その機能が異なっている。

入口に挿した物は悪魔を阻止するという。また窓に挿したPALMAは雷除けとされる（註6）。

樹木が雷を防ぐことは、昔から一番高く目立つ対象物として、雷によく打たれたため起こった考えである。高木に雷神を見だし、崇拜しはじめたのである。

その崇拝の痕跡は、ポーランドの風習に対応して、日本の風習にもみられる。ただし日本では、これをまた山の神の依り代とする。宮田は次のように述べている。

「下山の折にはかならず、五葉の松（高山植物）を一枝とって帰る。これは、門口にさしておき雷除けの呪いとするといわれるが、やはり神の依代としての意味のあったことは明らかである。」（註7）

PALMA は、来年の祭りまで置いておく。しかし途中で家の人が死ねば、それを死者の手に持たせて一緒に埋める風習がある。これは、生命の棒の意味があるためである。これを死者と一緒に埋めることは、死霊の再生を示唆しているのである。

それに古代ヨーロッパでは死霊に関してデモン・ヴァンパイア（ポーランド語のウピウルUPIOR）の思想があり、特に急に死亡した人、また自殺した人を恐れた。デモンはお墓を出て人間の血を吸うといい、これを防ぐために自殺者を葬るとき、死体の首、また胸ポプラ・はこやなぎの棒を刺したようである。地上に戻らないようにという意味である（註8）。

同じように、もし路傍で死者を見つけたとき、そのまま置いておき、ここを通行する人々は死者の上に枝葉を敷く。そして春になると全部燃やす。再生の観念とともに死穢を浄める観念も働いている。しばらく経つと、この場所に路傍の祠・十字架を立てる。あるいは近くの木に聖画などを張るという習慣がみられる。祭りのときには、ここにもお供え物をする（写真2）。

日本にもそれと似たような習慣がある。折口信夫は、樹精伝説の基礎として、仏説との習合において餓鬼と呼ばれるようになった死霊をあげていた。小栗判官と主徒の十一人の例をみて、火葬された家来は蘇生できなくなったのに対して、小栗は土葬されたため復活したと述べている（註9）。つまり日本の奈良時代以前の風葬において、灰を撒くこと、また後世の洗骨・骨を散葬することは、みんな復活を防ぐ手段であったとされている。

餓鬼は復活するために、肉が必要となるという

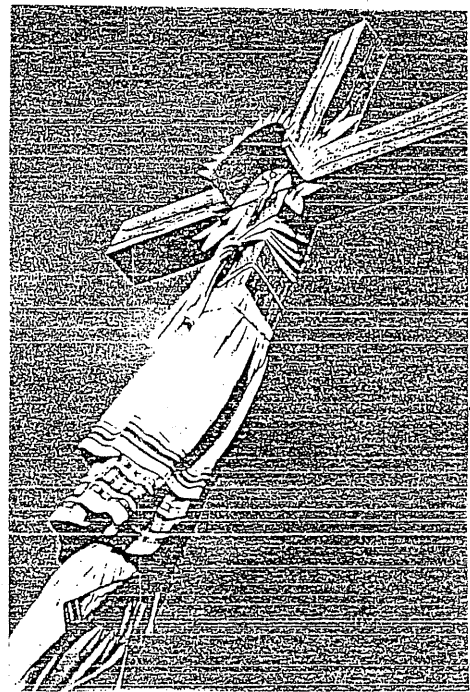
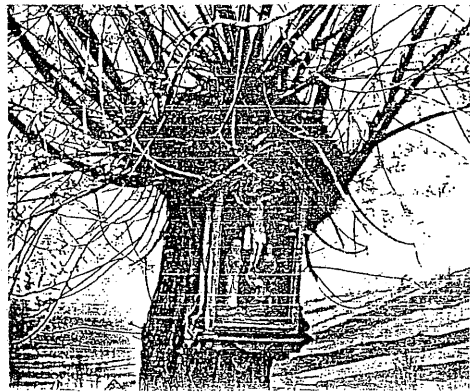


写真2 ポーランドの樹木崇拝
—キリスト教における原始信仰の残存

ので、人に連れて行かないように、しかばねの上に植物を投げた。また供え物として袖・靴などをあげた。（袖取り松の伝説型である。）死霊に関して恐怖・畏怖を感じる人間は、荒神を鎮めるためにそれを神と崇拝し始めたということである。

さて、復活祭の翌日は男女の若者は行列を作って、村外れの川に行つて人形を流す。この人形は



写真3 冬の女神—Marzanna

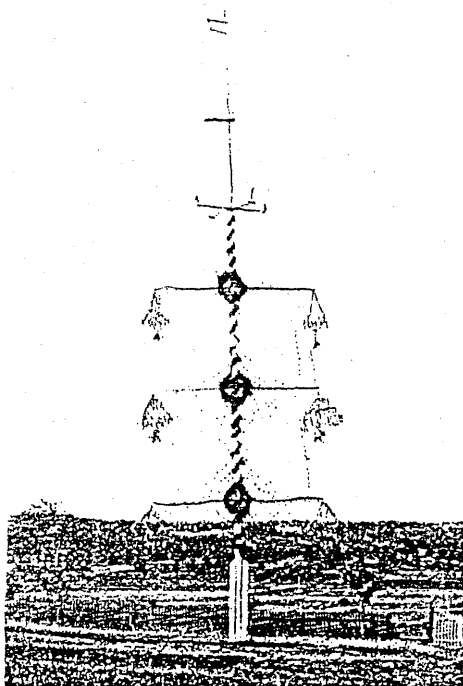


写真4 Gaik-Maik

木の柱を藁で巻いて女服を着せたもので、SMIERCICHA（シミエルチハ）また MARZANNA（マジャンナ）という。冬＝死の女神である。（写真3）。これを水に流してから、前もって準備した緑の小木を取って村に運ぶ。小木は卵の殻で飾ってあり生命をもたらす春＝生の女神・植物神・作神のシンボルとされる。

緑の小木を GAJ（ガイ）、GAIK（ガイク）という（写真4）。両方とも楽園・果実園を意味する言葉である。（註9）。これをきれいに飾るのは、作神に対する供え物とするためだと思われる。GAJ を手本にしてクリスマスツリーの装飾が生まれたようである。

GAJ をもって祭りをを行う事例が多いが、最近5月1日に催される儀礼の重要な採り物とみられている。5月の行事のため地方によって GAJ を MAJ（マイ）とも呼ぶ。

この日は、白樺・柳・栗・ポプラ・桜・七竈などの木の枝をとって、村を回りながら、家々の路傍の祠を飾る。主人は家の周辺を清掃して、道に砂を巻いて両側に栗の枝を刺す。

牧夫たちは早朝牧地に行つて協議を行う。枝・葉・花で作った装束を着た若者は、馬に乗って走る。目的に最も早くついた男は緑の王様と呼ばれる。女性は彼を倒して枝葉を奪う。そして新しく着替えさせて踊りに招く。

この儀式の由来は古代ギリシャまで遡って、ディオニソスの植物神の死と再生を想定させる（註10）。

ポーランドでは GAJ をとって祭りをすることは、最近ではほとんど人生儀礼と関わるのみである。それを高く立てる習慣は、「求婚」「婚約」に伴う。男性は夜人知れず森へ行き、そこから木を奪う。そして女が住んでいる家の前で5月1日の前夜に立てる。同時に村で一番嫌いな女の家の前に枯れた木、あるいは DZIAD（爺）という藁人形を立てる。刺のある植物をつけると、軽蔑を意味するのである（註11）。

柱の尖りに緑の枝、あるいは輪をつける。これは古代信仰における太陽崇拝の痕跡とみられる。

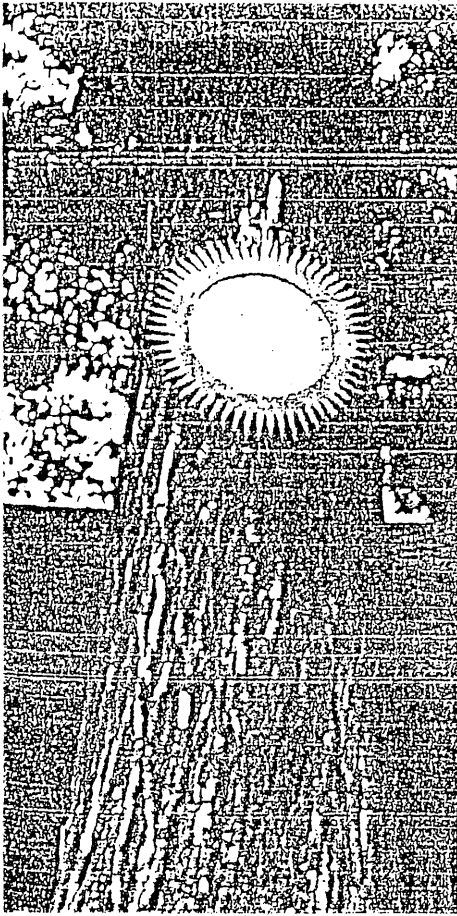


写真5 木のシンボリズムにみられる太陽信仰の残存

輪から垂れる房は光を象徴し、春を招く観念が働いている（写真5）。それに対応する発想は日本の髯籠・だしなどの飾りにみられる。

最後に紹介したい祭りとそれに登場する木は、6月23・24日の深夜に行われるSOBOTKA（ソプトカ）に関するものである。この日から益々日が短くなるので、弱まる太陽を強くするため、一晩中村外れの広場で大きな火を焚く。ここで古物・ゴミや箒などを燃やす。この夜、魔女は地上に集まり座談会をされるとされるため、この記念に若者が箒に乗って火の上で跳ぶ風習がある（註12）。

日本では焚火をする風習は、主に清浄・祓潔を

象徴するものである。柱松を持って祖霊を迎える。なおかつ病気・害虫などを防ぐ意味もある。これはポーランド程には植物生長の呪術と関係しないようである。しかし、火を焚く時間を見ると、祭りの前後つまり物忌みのときに行われる行事であるので、俗から聖へ、また聖から俗（ケーハレーケ）へと通過を示している点において類似がみられる。木を焚くことは俗＝ケから聖＝ハレに転換することを示す。また同じく逆の方向にも再生の観念がみられる。

次に、ポーランドでは火を焚いて、そのとき地に戻る悪霊・妖怪を払うのに対して、日本では祖霊を送迎することになっている。一見異なっているようだが、両者は火が特定の精霊を象徴する点においては、類似を示しているのである。

ポーランドの行事における樹木の用途は、原始自然信仰では、樹木は植物神、作神の具体化したものとされたことからきているが、また同時にデモン・幽怪と結びつけて考えられたために生じたものである。現在でも木の形態は、一般にこのような存在を連想させる。

紅葉は人間の手に似ているので、それは人間が木に化けたものであるとして、紅葉を嫌う。柳・はんのきも好まれていない。それらの樹木には、ほとんどの場合、女性の霊が結びつけられる。柳の長く垂れる枝は、彼女らの髪と思われる。特に池・川のほとりに繁るはんのきは、溺死者のデモンとされる（註13）。その木を伐る、血が出たり声を発したりするというような話が伝わっている。

溺死した女は水の精霊とされ、RUSALKA（ルサウカ）、またTOPIELICA（トピエリツア）と呼ばれる。夜毎に元の姿をとって木の周りにあらわれ、若い男性を誘ったりする。たまに人間の子供を産むといわれる。そして子供を奪い、代わりに自分の醜い子を残す。人間の母親は、そのときお墓から柳の枝をとってきてこの子を叩く。RUSALKAが子の泣き声を聞けば、助けにきて再び子を交換するといひ伝えられている。

樹木に棲む水の精霊は、溺死した者、また人を

溺める者を意味する言葉である。地方によっては、彼女を SIUBIELA (シュビエラ) と呼び、ギリシャの SYBILLA (シビラ、英の SYBIL) つまり予言力を持つ女神として考えられている。SIUBIELA は木下で機を織りながら歌を歌うとされ、これを聞いた人はすぐ死ぬという (註14)。

キリスト教が入ると、木の形態をはじめ樹力などは、キリストと聖者に関わって説明されるようになる。

例えば、はんのきの皮が赤いというのは、昔、神が世界を創造するとき、鬼と競争したからだという。神は造った狼が鬼を追いかけるので、鬼が木に逃げた。しかし、かかとを噛まれ、血が木についたために樹皮が赤くなったといわれている (註15)。

キリスト教には好まれる木と嫌われる木がある。

伝説によると、旅の途中でキリストは白樺と会ったという。白樺は挨拶をしたので、いつも髪を溶かしたような魅力的な格好を見せるのに対して、挨拶をしなかったポプラは真直で自慢するような形をして好まれない (註16)。

さらに一番好きな樹木は、りんごである。女性の美しさ、愛と性のシンボルとされる。これはりんごの形は女の胸にたとえられているからという。古代からりんごは豊饒の女神と思われた。現在も、秋の最後の実を木に残して植物霊に供える。同じ様な儀礼は日本にもみられる。

「長野県下伊那郡では、柿おとしは危険な仕事なので、下篠村の高塚様 (天狗) に参り、また梢には実を一つ残すという。最後の実を一つ残す風習は木マブリといい、柿の木に対しておこなわれるのがふつうで各地に残っている。こうすると、翌年実がよくなるともいう。木マブリは木守りであるとされるが、マブリは靈魂ともふかい関係があるようである。」 (註17)

ポーランドでは一般に、収穫をよくするには木を枝で殴る。そして逆にまずい穀物が出来たら、罰として樹皮を剥ぐ。

樹木が植物神=作神であるという観念に基づい

て、樹木を女と関わる人生儀礼に使う。子どもが出来ない女性にりんごの皮・実を食べさせたりするなどの呪いが行われる。従って誕生樹を植える習慣が存在する。男の子が生まれるとスラブ人は樅・ゲルマン人はりんご、または女の子が生まれると、スラブ人は菩提樹・ゲルマン人は梨を庭に植える。もしこの木が早く枯れた場合は、子供の早死を予言している。復活祭のとき、誕生樹の下に子供を連れて、元気に育てるようにお祈りする (註18)。

先に述べた例と同じように、日本でもヨーロッパの風習に対応する儀式がみられる。女の子が生まれると、家の庭で桐の木を植える習慣が会津地方などにみられる。桐の木をこのために誕生樹として示すことができよう。その木は女性の成長産育に伴い、人生儀礼まで及んで重要な役目を果たすとみられる。娘が嫁に行くとき、その桐の木を伐って簞笥を作り結納として持って行くのである (註19)。

最後に樹力と民間医療について紹介する。一事例として柏、すなわちどんぐりと病気治しを見てみる。

ヨーロッパでは、病気は木に宿る霊がもたらすものであり、樹霊は病因であるとされる。病気が治るメカニズムは、病院を再び木に移すことである。

柏は力の象徴である。昔から異教徒の崇拜対象とされた。柏の枝を折った人が病気にかった、また死んだという話は現代までたくさん残っている。日本と同じように、樹木に亡霊=デモンが宿ると信じ、災難はその怒りのせいで起こるとされている。柏は主に皮膚の病気、歯の痛み、骨折、性病、また村全体の流行病をもたらすというので、それを使ってそれらの治療を行う (註20)。

どんぐりは形の上で出来物、あるいは歯と対応させる場合が多く、歯の痛みや出来物を治すためには、木の下に穴を掘って三回唾を吐いてから三回木を回らなければならないという。

さらに骨折したときや性病にかかったときは、本人を樹木の幹の分かれたところを通して引っ張

れば、治ると信じられている。そして骨折の場合に本人は木の枝を折って包帯で縛って元通りに繋ぐ。枝は癒着すれば、折れた骨も治るといふ呪術がある。これは、木から人間に移した(憑いた)霊を再び木に移すということである。

また、村で流行病がはやったとき、若い男女は森へ行って、そこから柏の木を伐ってくる。木を引っ張りながら村を回り、最後に村境へ戻り、その木の十字架を削って地に指す風習がある。ここには、日本と同じような観念が潜み、病気を樹木に乗り移した上で、境に追い出すという意味がある。

2. 概括

樹木と人間の間に神秘的な関係があるのではないかというような疑問は、古くから全人類の討論のテーマとなっている。植物は人間と同じようなものとされ、植物レベルと人間レベルの間の連続的循環が考えられた。

昔から樹木は、月のシンボリズムを体現していたという。秋になると葉を落とし、春になると再生するからである。月の満ち欠けによって成長した。ヨーロッパだけではなく、世界の木の精霊をみると、大母神のあらわれであると考えられよう。これは大地と水に対する生命の問題が指摘できる。

しかし、日本では大地母神という神の観念が見あたらない。同時に柿・槐・銀杏に関する伝承には、母神の多産性を現象する形態をはじめとする樹力をみると、同じような機能の神の思想が示されているといつてよい。

ここで、ヨーロッパの樹木崇拝と日本の樹木が生まれた条件の一つとして、国々の風土を考える必要性があらわれる。ここでは、「モリ」という観念の理解が重要である。ヨーロッパでは樹林信仰は、聖地とされる森林から分離したのに対して、日本では同じような過程が山林において行われたとみられている。

ローマ文化におけるアーリア民族の例にしても、その聖地は自然の森林=ネミに示される。ネミはローマの郊外にあるアルパ山麓に位置したにもかかわらず、山ではなく、むしろ深い森自体が聖域とみなされた(註21)。また樹木崇拝の発祥地と思われるギリシャの場合、平地・野原は、原始的樂園と呼ばれる聖なる森に覆われ、この中に生命の木が存在する。

ポーランドでみられる木・それが登場する祭祀儀礼は、主に古代ギリシャの神話の画像を再現するものである。これによって祭祀に用いられる木の枝などは、「GAIK」(ガイック)、また「SAD」(サッド)と呼ばれ、両方とも果樹園・庭園・樂園を意味する言葉である。

その語に対して、日本の文化における「モリ」がある。その言語は「峯」「峰山」「山」などを示す。「森をもって神の所在とする形態に準じて考えるのは、山や丘の上にある・・・」(註22)ということである。日本では「モリ」といえば「諸」「室」「杜」をはじめ「盛り」を指すという。

日本では高く盛り上がる場所であれば、「モリ」とされる。樹林の中からそびえる木・巨石・塚などがこれにあたる。それを通して神の降臨をはじめ、神の宿るもの——コンモリ神籠り——の観念が表出する。

スラブ人の森=庭園と日本人の森=山の概念には、不安感・恐怖・畏怖が伴い、またエリアーデが述べる「HIEROPHANY」(神聖視されるもの)の思想が働いている。ただしすでに指摘したように、日本では山と樹林、さらに一本の木が習合し融合し、神聖なる森として認識されるようになっていく。

そうすると、宇宙・大地・水・石・動物・植物などのようなHIEROPHANYの中で、日本では、圧倒的に多くの場合は、樹木のHIEROPHANYとして山のHIEROPHANYが、バラバラではなく習合して存在する、といえるのではないか。

もし両者の文化における森の観念を、これが果たす機能などにおいて、同一視すれば、この森の中から登場する樹木は、きわめて相似的な存在と

なる。

両文化の共通点として、まず挙げられるのは、ともに樹木が豊饒神の具体であるとしている点である。それによって樹木は、生命の源泉として出産・生殖力を増し、豊饒を保証してくれるという。さらに生命の木として、植物成長をはじめ人生・性の原始的源泉となる。また特に、樹木に伴う聖水の問題に関連して論じられることが多い。

ヨーロッパでは、楽園の中にある木の根元から泉が湧く、また川が流れでるというビジョンがみられる。水は生命の根源であり、このほとりが古代文明の発祥地になった。

日本における山には、川の源泉が存在するという認識から、川を産み出すとされているため、山に関して水口の神の思想がある。その水口の神は、樹木の伐採を禁じると同時に水を恵む神(水分神)として拝まれている。農業を専業していた人々にとって、山は生活の利害を左右するとして、結局森=山の樹木は、山の神と結びつけられるに至ったと考えられる(註23)。

樹木を持って豊饒多産などの占いを行うのは、樹木が山の神の性質を持つからである。すなわち、山の神は生命をもたらす女性であるということが出来る。

ヨーロッパでは、この女性の造形は大地母神の女神であるのに対して、日本では山の神である。この場合に山の神を女性として示し、一般的女性に対して嫉妬深い妻であり、また十二人の子供を産む母であるという性格に注目しなければならない。

それによって樹木にみられる繁栄・成長の母神の顕現は、ヨーロッパでは地母神、日本では山の女神の特徴を持つ。この点が、両者の樹木崇拜における相違といえる。

しかし、同時に女性の多産性が促す農耕豊饒、つまり農作儀礼と性との関係において、両者を同一視することもできる。あるいは人生儀礼と関連付けることができる。

さらに日本の文化における性の力・生命崇拜の問題を考える際、その起源を大陸に求めることも

可能であろう。日本で有名な桃太郎の昔話は、桃に関する生命・長寿の象徴を大陸から受け取った際に、樹木に関する地母神の概念も同時にやってきたのではないかという仮定も可能ではなかろうか(註24)。

木の信仰に関わる原始的生殖崇拜の名残りは、現在も行われる古い・呪いにみられる。ヨーロッパでは求婚の風習のために用いる「求愛の棒」「五月棒」、また日本では「縁結び木」「祝い棒」などがこれにあたる。これを持って受胎を促す呪術を行うのである。

特に、両者の文化に共通してみられる、樹木責めの習慣は重要である。果樹は実を産むことから豊饒多産の思想へとつながる。そのため、ヨーロッパではクリスマスの夜に若い女が果樹園へ行くと、木が実るようにこれを打つ。また新婦は子供ができるようにこれを抱きしめる。それに対して日本では、小正月に子供のできない新婦の尻を枝で打って、壊胎を促進させるのである(註25)。

樹木の霊力は女性の精神生理だけではなく、両者の文化における死霊の観念にも求められる。人間が死ぬと、死霊、妖怪となってあらわれる。その魂は木に移り木霊となるという。色々な姿をとって人間の生活に対して利害をもたらすと信じられている。

「死」に基づく畏怖感・神秘感において、木が崇る荒神であるという観念が存在する反面、「死」から穢れを除くことによって、死者に対して神の観念が生じるということは、両者の文化で論じることができる問題であろう。樹霊は生命を連続させて、またその生命を生存させてくれるものなのである。

ヨーロッパではキリスト教が入るにしたがい、自然的精霊・死霊は、キリスト、聖母マリア、聖者と習合する。一方、日本では仏教の影響のため死者・精霊は仏と同一化される。霊魂が死霊から不滅の祖霊へ昇華融合するのは、弔い上げによって神が仏となる、すなわち祖先と仏は帰一合体しているとみられる。

樹霊について考えると、古代ヨーロッパの木の

精霊 DIV (デイヴォ) は、デモンとされた。DIV はアーリア語の言葉であり、驚き・奇跡を意味する。これをもって古代の天つ神は、DEIVOS (デイヴォス) と呼ばれた。しかしキリスト教が入ると、全てが神となって、デモン・ディアボル「黒い神」に対して、BELBOG (ベルボグ)「白い神」があらわれた。これを具体化させたものとして、後世のキリスト・聖者が生まれた(註26)。

例えば、古代ヨーロッパ人の主神は、雷神ゼウス、またジュピータであったという。そのギリシャの名前は、スラブの神として訳されてペールン PERUN と呼ぶようになった。その神の具体は樫の木である。樫は PERKUNOS (ペルクーンノス) という。またラテン語の雷は PER = 打つの意味から PERKUS (ペルクス) といい、樫と強く結び付くとみられる。樫は森の一番高い木であるため、よく雷がこれに落ちたので、元々の名前 QUERCUS (ケルクス) を PERKUNOS に改名したといわれる。しかし、キリスト教とともに聖者崇拜が浸透し、雷神の崇拜は聖 ELIAS (エアラス) に転嫁されたと思われる(註27)。

自然的神の人格化が進むと同時に、英雄神のあらわれが目される。民衆に対して援助・難病全治・災厄祓除をもたらす英雄神とされる歴史的人物・宗教者などが登場する。

特に日本ではシャーマンとの関係の上でこの発想が強い。樹木の霊力を使って巫、また仏教の修験者は宣託・呪術を行う。改めて樹木を持って生命、連続的転生を促す呪術をするのである。ここでは木というよりも、霊木から作った杖をはじめ、棒・箸・柱などがあらわれる。あるいはヨーロッパの場合にキリスト教の十字架(祝い杖)である。

杖は旅人が携えるもの、英雄人は大蛇を退散するもの、宗教者は奇跡を起こすものである。杖を地に刺せば木が成長することは、樹霊の力を持って再生する呪具である。

さらに杖から成長した樹木は、逆さ木とされる。ヨーロッパでは、生命の木に対する逆さの観念において、この木の根は地下、頂上は神座となるというので、宇宙の顕示とされている。宇宙の木は

天・地・地下という三つの世界を結ぶ、あるいは世界を支える柱として描かれる。

そして同時に三世の観念における、現世とあの世との間の通路である。そのために異質の地域の境異に立つと考えてもさしつかえないだろう。

日本では、宇宙柱の観念は存在しない。しかし神木が立つ山は、世界の中心シンボリズムと関係する。にもかかわらず、現世とあの世との境について述べるなら、山は死者を葬る場所なのである。同じく森・塚・川のほとり・道の辻などが埋葬地とみられる。これらの所に所在する逆さ木は、祖霊・神の世界、すなわち他界(逆さ世界)の象徴とされる。

「逆さ」というのは、ヨーロッパで逆立ち世界、つまり祭りのときなど生じる神々が活躍する空間・神話的時間を意味する。また日本では、「逆さ」の「さか」は「境」を示し、人間と神々などの交流が有り得る空間・時間であるので、両者は共通する思想に基づくとみられる(註28)。

したがって、境界に存在することにおいて、あの世から入ろうとする悪霊を防ぐ厄除けの役目も果たすのである。

キリスト教の場合は、柱——逆さ木——杖木の観念は十字架に含まれた。これを持ってキリストが復活して人間を救済するという。キリスト教的救済の観念によって、それ以降聖者は十字架をとって罪・死・悪魔と闘う。十字架は宗教上の「魔法の棒」である。これをまた昔と同じように村外れの辻のところに立てたり、お墓の上などに立てたりすることは、不教時代の神木とって代わったためであろう。

以上、ヨーロッパ文化に於ける樹木崇拜と、日本文化に於ける樹木崇拜は基本的に近いものであるということを述べてきた。これをまとめると以上のようなになる。

1. 樹木は、「他界」「靈魂」の理解に対して重要な手掛かりである。木霊は靈魂と結びつけられる。自然の季節的移り変わりにおける死と再生、そして人間の死と再生、そして人間の死とその靈魂の復活再生の問題が

絡み合っ、連続性を見せる。樹木が亡霊であるとされるため、多種多様な奇跡・祟りが起こる。また、樹霊は亡霊のあらわれとされるため、境の問題をはじめ厄除け、病氣治し、作物吉凶の問題と結びつけられる。

その展開として特に日本では樹木崇拜と祖先崇拜が結合したとみられる。

2. 樹木と自然信仰の関わりからみると、両文化とも豊饒をもたらす女性の具像化としての神々が目立つ。ヨーロッパの大地母神—植物神と日本の山の神が対応的とみられ、樹霊と関係する。
3. 樹木に関わる人物などにおいては、それらを神に近い存在とみる傾向が強い。樹木は彼らが用いる採り物・呪具である。奇跡はシャーマニズムとの関係の上で語られている。特に日本では仏教の修験道の特徴に関する問題が、樹木崇拜に強い影響を与えているとみられる。

ヨーロッパでは最近、日本文化に関する興味が高まってきており、様々な研究分野の著作が翻訳され出版されている。殊に日本の歴史・宗教史・文学史についての総合的な資料があらわれているが、今日まで日本の民俗学の業績はあまり紹介されていない。特に、木の信仰を把握する論文などは、ほとんどに手に入らない状態であるが、数少ない入手可能な書物の一つである、F・S・クラウスが書いた『日本人の性生活』という本の中では、“植物崇拜と性器崇拜”の問題を挙げて、神道の立場から論じていた。

「シントウの神学者は、他の宗教の神学者と同じく、一種の天地創造の歴史を語っている。これはあきらかに性生活に根ざしており、また木の霊の信仰と非常に密接に結びついている。その総合関係はあきらかではないが、その起源はすべて、最後の形をとったその輪郭から今なおはっきり知ることができる。」(註29)とし、樹霊を霊魂と結びつける上で、日本の樹木崇拜は性器崇拜から生

じたのではないかと述べている。

それにネリー・ナウマンは「日本のヤマのカミ」という本の中で、樹木の問題に触れるが、それはほとんど山の神を「森の主」であるので、樹木をその神の居所・遊び場とみて、樹木の山の神の依り代とする思想を、概括的に説明する。さらに、同時に樹木自体を神として認めて、死者霊と結びつけている。

「神として祭られる樹木は、必ずしも、直接山の神と関連するわけではない。このばあい、樹木を居所とする神が信仰されるのではなく、木そのものが霊魂を持つとされていること、これにまた、木がすなわち神であるということは、人びとが伐ろうとしたときに起こった、さまざまなことを述べた伝承をみれば、明らかになる。」(註30)とする。しかし、ナウマンの論理の中では、山の神が考察の対象であるため、樹木の役目を述べる際、筆者が再びその神の関わりの上で述べている。例えば山の神は産を助けるというので、山間に所在する樹木が子授けの呪術に使われると指摘している。また山の神は病氣や死をもって処罰するとされるため、樹木に治癒の願を掛けるという。

一方日本では、現在までヨーロッパ文化の樹木崇拜の諸問題を把握する、総合的な資料が少ない。ELIADE, FRASER, LACKEを除いて、『グリム童話』『ヨーロッパの森から』『ドイツの民俗』というような書物が翻訳されるが、その中での記述は木の伝説、木にかかわる禁忌などの紹介に限られている。

幸いながら、最近の自然保護運動とともに、樹木に関する興味が高まり、異なる文化における樹木に対する考え方、いわゆる「自然認識」を試みる視点が注目を浴びている。そこで、北村昌美は「森林と日本人」という論文の中で日本人とフィンランド人とドイツ人に対する「親しい木・好まれる木」などという回答調査の成績を述べ、三つの文化における森林、樹木への接触というような認識を比較文化的に捉えている(註31)。このような考察は、直接に民俗学の立場から論じる木の信仰と関係しないにもかかわらず、樹木の生態の

ファクターもお互いの文化における木の問題の理解のために、重要な手がかりであるといえよう。

注

- (1) 同じヨーロッパ文化の中で、樹木崇拜をもつ国（例えばフィンランド・スウェーデン・ドイツ・ポーランド・ソ連のエストニア）もあるが、樹霊がみられない国もある。それに、樹霊は国々によって、多様であり、山の精霊、森の精霊、また死霊と結びつけられる。それは、その国が古代オリエントあるいは古代ギリシャの影響範囲に含まれていたことによって、樹木信仰のとらえかたが違くとみられる。
- (2) アレクサンダー・ブリクナー『ゲルマン、スラブの民俗宗教史』宝文堂 1972ポーランドの樹霊信仰は、元々森信仰と結ばれていて、樹霊が森の精霊と思われている。その精霊はSKRZAT（スクシャット）といい、穀物霊と同時に金銭の精霊、竜や家の精霊なのである。その姿は毛むくじゃらな小人として描かれ、よく昔話などの中で語られている。同じように、地下に住む小人族（KRASNIETA クラシニエニタ）は、家の精霊とされる。それに伴って、樹霊、霊木を述べる際、死霊と同一視して論考されることが多い。
- (3) 1970 Osker Kolberg dzieła wazystkie, Mazowsze 7-42, PTL Wroclaw-Poznan
- (4) 佐々木勝『厄除け—日本人の霊魂観』名著出版 1988, p. 82
- (5) K. Seweryn, 1958 Kapliczki i krzyze przyrodne w Polsce, PAX Warszawa
- (6) T. Karwicka, 1979 Kultura ludowa Ziemi Dobrzynskiej, Torun PWN
- (7) 宮田「岩木信仰」『津軽の民俗』吉川弘文館 1970, p. 281
- (8) 死霊にかかわる恐怖によって、様々な伝説が生まれた（ヨーロッパ全体に吸血鬼の話が広く語られる）。死霊はデモニシュな存在であり、人間に対して災いをもたらすという。そ

れと同じような観念は日本にも見られ、亡くなった人の霊を荒々しい存在とみて、恐れる。

- (9) 折口信夫「餓鬼阿弥蘇生談」『民俗芸術』1-1・2・3, 1928, 全集2
- (10) ポーランドにおける樹木信仰の由来は、ギリシャの神話まで遡源するとみられる。緑の木を果樹園・楽園と呼ぶことから、木にかかわる信仰は、ブルガリアを通してギリシャから直接ポーランドに入ったと断定される。A.Fischer, 1938 Drzewa w wierzeniach i obrzedach ludu polskiego LUD 35 PTL Lwow
- (11) T. Karwicka「Zwyczaj stawiania "majow" w polskiej kulturze ludowej natle europejskim」Torun UMK（出版年次については不明）
- (12) 6月23日の晩篝火を焚く習慣は、ポーランドで南の方しか残っていない。また最近ではほとんどが遊び・競争として行なわれるのみである。
- (13) 亡くなった女の霊が木に化けた話は日本にもある。ここで木の中から特に杉（験の杉）があげられ、山の神の巫—修験者の尼の体現とされる。ポーランドではそのような話が、川のほとりに茂る木に限られるのに対して、日本では必ず山に茂る木と関連付けられる。
- (14) W. Klimga, 1960 Jeszcze o rusalkach i pokrewnych postaciach demonicznych i ich zalezności od tradycji grecko-rzymskiej LUD 45 PTL Wroclaw
- (15) 前掲書(10)
- (16) 前掲書(5)
- (17) 飯島吉晴「行事・民間にみる柿」『採集と飼育』10, 財団法人日本科学協会1981, p. 538
- (18) 谷口幸男編『ヨーロッパの森から—ドイツ民俗誌』日本放送出版協会 1981
- (19) 誕生樹を植える習慣は、日本に広く戦前まで行われたという。桐の木の外に、桜と櫨を植えることは一般的であった。
- (20) 前掲書(10)
- (21) J. G. Frazer, 1978 Zlota Galaz, PIW Warszawa

(22)池田源太「山の信仰」『山岳宗教史研究叢書』
6, 名著出版 1976, P. 60

(23)和歌森太郎「山岳信仰の起源と歴史的展開」
『山岳宗教史研究叢書』1, 名著出版 1975,
pp. 21-22

(24)桃の木にかかわる信仰が、大陸から日本に取り入れられたことについて、日本の研究者の意見は分かれている。その論についてすでに折口が次のように述べている。

「書物ばかりに依頼することの出来る人は、支那にこうした習慣が古くからある処から、支那の知識が古くから書物をとほして伝わったもの、と説明しているのである。又、わが国固有の風習だと信じている人もあるが、何れにしても、日支両国の古代に、同じような民俗があったということは、興味もあり、難しい問題でもある。此場合、正しい解釈が二つより出来るはずである・・・支那と日本とで、何の申し合わせもなく、偶然に一致したものと考えるのが一つ、其から今一つは、わが国の歴史家が想像している以上に、支那からの帰化人の受けた影響が多かったところに

ある。」

折口信夫「桃の伝説」『愛国婦人』491, 1925,
全集3 p. 56

(25)中山太郎「果樹責」『日本民俗学』2, 大和書房 1977

(26)前掲書(2)

(27)同上

(28)ヨーロッパに伝わる「逆さ木」=「逆さ世界」の観念は古代オリエントの思想とともに入ったと思われている。また日本で仏教(修験道における神憑り-入巫儀礼と樹木)の影響によって形成されるため、両者の由来は同じ発祥地からでてくるのではないか。それに民間では、塞の神と結びつけられ、死者の世界と現世界の境に立つ守護神とされた。

(29)F. S. クラウス『日本人の性生活』世界性学全集3, 河出書房 1957, p. 30

(30)ネリー・ナウマン『日本のヤマの神』言叢社 1990, p. 74

(31)北村昌美「日本人好みの自然」『創造の世界』Quarterly 69-71, 小学館 1989

新刊紹介

呂理政著

『天・人・社会 試論中国伝統的宇宙認知模型』

本書は、「台南東嶽殿の打城法事」(『民族学研究所資料彙編』2 台北;中央研究院民族学研究所 1990年)という台南の紅頭法師の儀礼の詳細なモノグラフを発表して注目される呂理政氏が、中国の民俗宗教を体系的に捉える枠組みを提示する目的で著した書である。構成は、第一章緒論;多重宇宙認知,第二章宇宙観的概型及其流演,第三章天;宇宙の象徴符号及其操作,第四章人;人体宇宙及其均衡和諧,第五章社会;順天応人的関係網絡,第六章結論;伝統宇宙認知模型的建構。

本書では古典的宇宙論について論ずるところよりも、各處で自身のフィールド・ワークに基づいて検討された部分が興味深く、枠組みの図式化も注目される。台湾人の宗教信仰の解明が著者の長期工作目標とされており、その出発点をなすものである。

(丸山 宏)

A 5 判 279頁 中央研究院民族学研究所
1990年3月刊行